

佳作

届かなかった場所

山形県川西町立川西中学校

3年 平田 心花

「君が諦めるときは、他の誰かが勝利するときだ。」

これは、元NBA選手のコービー・ブライアント氏の言葉だ。私はこの言葉を大切に熱中していることがある。それは、陸上だ。県大会で、私は東北大会出場を目標として練習していた。東北大会に出場するためには県大会で4位以内に入る必要があった。そして迎えた県大会。結果は5位。惜しくも4位以内には入れず東北大会出場の権利を得ることはできなかった。あと8センチ。あと8センチさえ跳べていたら……。東北大会出場にもう少しで手が届きそうだったからこそ、とても悔しかった。

私が陸上を始めたのは小学4年生の頃だ。そのときは、陸上に興味をもっていただけではないが、一つ下の双子の弟が二人とも入るからという理由で自分も入った。スポ少に何度も通っていくうちにどんどん慣れていき楽しくなった。だが、その「楽しい」は陸上に対してではなく友達に会うことができるからだったと思う。

中学校に入学しても私はまだ陸上に対して興味をもつことはできなかった。というか、興味をもとうとしなかったというのが、あの頃の本音なんだろう。かといって他に得意なスポーツがあるわけでもなし。何かしらの部活には入部しなければならぬからと、スポ少に入ったときと同じような希薄な理由で入部した。だが、実際に陸上部に入ると練習内容は同じことの繰り返しだ。そしてひたすら走る。スポ少との練習量の違いに圧倒され、私は部活に行きたくなくなっていた。そんな半端な気持ちで練習しているので、もちろん大会でもライバルに勝てるはずもなく、気づけばだらしない気持ちのまま中学1年生の部活を終えていた。私は中学2年生になり、中学1年生になった弟二人が入学した。弟は自分と違って小学生の頃から陸上が好きで、県大会でも入賞するなど自分とは比べものにならないくらいすごかった。そんな弟も陸上部に入部した。部活も真剣に取り組み、家に帰れば自主練をする。そんな弟をみて“負けたくない”“少しでも追いつきたい”という思いが芽生えた。自主練を始めてからは地区総体で勝ちたいとまで思いはじめていた。自分にとってはすごい成長だった。

地区総体本番、私は100メートルと200メートルに出場した。200メートルでは3年生もいる中で決勝に進むことができた。100メートルでは今まで負け

続けてきたライバルを抑え1位を取ることができた。顧問の先生にもほめられ「楽しい」「うれしい」という感情を陸上をやっている中で初めて感じられた気がした。そして私の中で部活をすることが毎日の楽しみに変わっていった。

中学2年生も後半にさしかかり、私は陸上部の部長になった。大変なこともたくさんあったけれど大切な仲間と楽しい部活をする時間はとても幸せだった。さらに、走幅跳にも挑戦し、県強化指定選手にも選ばれることができた。そこからは走幅跳をメインに練習に取り組んだ。ある日の冬、部活で顧問の先生が来年の目標を聞いてきた。今の自分がこんなこと言ってもいいのか、そう思ったが、自分に嘘はつきたくなく「全中出場です。」と答えた。先生は今の自分には到底無理な目標を言ったのにもかかわらず、笑わずに話を聞いてくださり、私はこの人にだけは絶対に恩を結果で返そうと決めた。

あつという間に最後の地区総体の日がきた。結果は走幅跳1位で県大会出場。全日中通信でも、追い風参考ながら県2位になり県大会に弾みをつけることができた。迎えた県大会でも結果は5位。今回は風が味方をしてくれなかったようだ。強い向かい風と雨の中、自己ベストが出せた。出せたはずなのに悔しい。うれしくない。私の中でいろいろな感情が混ざりあい自然と涙がでてきた。特に悔しかったのは全中出場を目標にしておいて東北大会にすら出場できなかったこと。自分の東北大会出場に向けてたくさん指導して下さった顧問の先生をこんな形で裏切ってしまったことだ。本当に不甲斐ない。立ち直れないままただ日付だけが変わっていく。そんなときにコービー・ブライアント氏の「君が諦めるときは、他の誰かが勝利するときだ。」という言葉を知った。「今、私諦めちゃってるんだ。他の誰かはまだ頑張っているのに。高校で絶対リベンジしたい。」私は次こそ恩を返そうと決めた。

これを書いている8月17日はちょうど全国大会がある日だ。私が目指していた場所。けれど届かなかった場所。テレビ越しに見る全国大会。悔しくて情けない。前まで思ったことなかったのに。高校ではリベンジ。リベンジ。リベンジ。陸上を大好きにしてくれた先生や家族のため。誰かが諦め私が勝利する日が来るまで……。